HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『夜の寝覚』における＜帝闖入＞場面の方法 ： 帝像の変容をめぐって
Author(s)	高橋, 雅恵
Citation	国語国文研究, 104, 26-40
Issue Date	1996-11-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94836
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_104_26-40.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『夜の寝覚』における〈帝闖入〉場面の方法

――帝像の変容をめぐって――

高橋雅恵

一

『夜の寝覚』のいわゆる〈帝闖入〉事件が、この物語においていかに重要なものであるかについては、もはやいうまでもないだろうが、従来その重要性は主として二つの側面から論じられてきた。その一つは、帝の接近によって、寝覚の上が内大臣へ対する自分の本当の思いに気付いたという点で、心理の掘り下げによる物語の表現の方法的達成を評価すること。そしてもう一つは、帝が彼女を逃したことによって、以後彼女が帝の執心と内大臣の嫉妬とに悩まされることになったという点で、物語の構想上への影響の大きさを評価することである。さらにつけ加えるなら、寝覚の上が帝を拒み通したということは、野口元大氏も指摘されるように、「彼女を決定的な汚濁の中におくことを回避し」[1]たのであり、そうすることで、主人公としての彼女の理想性が保証されていることにもなろう。このように見てみると、〈帝闖入〉事件がこれまで寝覚の上の側の問題に収斂される形で論じられてきたのは、ごく当然ともいえるかもしれない。

とはいえ、第一点目に挙げた心理描写の掘り下げ以外の表現方法については、未だ明らかにされてはいない。たしかに、これまでにも『夜の寝覚』と『源氏物語』との表現面での比較考察は数多くなされており、〈帝闖入〉の場面も例外ではなかった[2]。が、これらの考察は同趣向の場面における描写や登場人物の心理の類似の指摘にとどまり、不意に侵入した男を拒否する女の側の表現に重きを置いたものなのである。しかし、この〈帝闖入〉事件、ひいては『夜の寝覚』を論じる際、〈帝闖入〉という事件のもう一人の主役である帝をめぐる物語表現そのものの方法的解明は看過し得ないだろう。

むろん、帝が寝覚の上を逃してしまったのは、寝覚の上の強い拒否のためであった。しかし一見当たり前のように思われるこの事実を、帝の果たした機能の問題として捉え直してみると、寝覚の上の心理の掘り下げと理想性保持のためには、帝はそのようにしか造型

され得なかったのだとはいえまいか。換言すれば、〈闖入〉によって帝が果たした機能とは、寝覚の上をして内大臣への自らの思いの深さを知らしめたことであり、同時に実事に至らなかったことによって寝覚の上の身の潔白を保持し、彼女の心強さを印象づけ理想性を保証することに他ならない。そして、まさにそのためにこそ、帝という人物は造型され表現されているのだといえよう。事実、拙稿[3]で既に指摘した通り、この物語において帝をめぐる表現は実に周到に選び取られているのである。

そこで、帝をめぐる表現に改めて注目してみると、この〈闖入〉場面での、寝覚の上に対する一連の帝の言動と思考、いわば「口説き」が、寝覚の上の拒否に呼応するように変化していることに気付くはずだ。この事実は注目に値するものであり、これまで看過されてきたこの物語のもう一つの表現方法を解き明かすための糸口なのである。すなわち、寝覚の上という人物に顕著な心理描写の方法とはまた別の、『夜の寝覚』のもう一つの表現方法が、〈帝闖入〉場面における帝をめぐる表現を通して、初めて見えてくるということなのだ。

以上の観点から、本稿では〈帝闖入〉場面がどのような物語表現によって成り立ち得ているかという問題について、帝の「口説き」を中心に検証する。それは必然的に、帝の造型の方法の解明と表裏一体のものだといえるはずである。

二

〈闖入〉始発時の帝は『源氏物語』の柏木であった。これは決して的外れな見立てではない。まずは、二人の〈闖入〉あるいは〈密通〉に至るまでの経過と動機とを見比べてみよう。

〈闖入〉に先立って帝は寝覚の上を垣間見しており、その後、

[帝]「いかでこの人に、いとかくだけきと、また心の内をだに、つぶつぶと言ひ知らせて気色をも見ばや。…」とのみ、つゆまどろまず思し明かされて、見き、とばかりの気色もほのめかさせたまはまほしけれど…　（三〇一頁）[4]

という願望を抱いていた。恋しい人に私の思いを伝えたい。私はあなたの姿を見たのです、と伝えたい。そうしたらあの人は何と言うだろうか。――この願いはそのまま、若菜巻の柏木の願いに通じるものなのである。

ただ、いとほのかに、御衣のつまばかりを見たてまつりし春の夕の飽かず世とともに思ひ出でられたまふ御ありさまを、すこしけ近くて見たてまつり、思ふことをも聞こえ知らせてば、一行の御返りなどもや見せたまふ、あはれとや思し知る、とぞ思ひける。

（若菜下巻、小学館日本古典文学全集・四巻・二一三～二一四頁。以下、『源氏物語』本文の引用は全集本に拠る。）

垣間見の折に目にした女の姿をもう一度、今度は間近で見たい、この苦しい胸の内を訴えたいという思いの高まりが、二人の男を〈闖

入〉させるのである。（柏木と女三宮との〈密通〉の状況は、女性の側から見ればまさに〈闖入〉に他なるまい。）

このことを確認した上で、〈闖入〉場面での帝の「口説き」の検討に入ろう。

［帝］「あな心憂。こは、いとかうもの思し知るまじきほどかは。憂き我からは、かくこそ児になりかへりたまふ人もありけれ」など、いと恥づかしげにあはめさせたまふも…　（三一三）

寝覚の帝の「口説き」はこのように始まる。しかし、寝覚の上の涙にくれる様子が余りひどいのを見て一転、帝は寝覚の上をなだめにかかるのであった。

「しばしこしらへて、心をのどめさせむ」と［帝ハ］思しめせば、あながちに様悪しうもてなさせたまはで、「まことに、①我が身思ひ知られ、(A)心憂く、若々しき御心かな。②昔より思ふ心をむなしうないて、年頃を経て思ひわたるさま、③故大臣、親しかるべき人といふ中にも、幼くより分きて親しうならひ思ひて、御事を限りなく思ひけるままに、『なからむ後、必ず尋ね知りきこえよ』と、心苦しかりける女どものあまたありけるをばさも言はず、ただ御事をのみいみじう。折々の事も聞こえ出で、恋しき昔の形見とも思ひて、渡る度ごとに消息きこゆれ。…①身のおぼえ、かたはしに、いみじく屈じ卑下せられて、かくてものしたまふ程、②昔よりの心の内をあはれとも心憂しともきこえ知らせむとて、こなたに渡り参りたまふと聞きて『良きひまななり』とうち忍び参り来つるを、いと憂くも怖ぢ惑ひたまへるかな。ことわりなれど、また、いとかばかりには、などてか。④契り遠くものしたまふと見てしかば、世の許しあるまじき今しも、⑤残りなく情けなき心を見えたてまつらんとは思ひも寄らぬものを。いかにひたぶるなる人のもてなしに思ひならひたまひにける。(B)御心ときめきこそ、なかなか浅けれ。(C)よし、心みたまへ、げにや御心より外に見えたてまつりけると。ただ心を鎮めて、きこえむことを良く聞きたまひて、⑥げにあはれとも、また、にくしとも、一言答へたまへ。ただ人や、人の心許さぬ振る舞ひをも押し立つらむ、いとかく所狭き身は、人の進み参り、もしは上りなどするを、待ちかけつつのみ見るものとならひにたれば、(D)御心許されぬ乱れはよもせじとよ」と、いとのどやかに恥づかしげに、情けなき乱れはせさせたまはぬに…　（三一三〜三一六）

この帝の初めの「口説き」は、次に挙げる柏木と女三宮の密通場面に酷似している。

［柏木］「(1)数ならねど、いとかうしも思しめさるべき身とは、思ひたまへられずなむ。(2)昔よりおほけなき心のはべりしを、ひたぶるに篭めてやみはべなましかば、心の中に朽して過ぎぬべかりけるを、なかなか漏らし聞こえさせて、(3)院にも聞こしめされしを、こよなくもて離れてものたまはざりけるに、頼みをかけそめはべりて、身の数ならぬ一際に、(2)人より深き心ざしをむなしくなしはべりけることと動かしはべりにし心なむ、(4)よろづ今はかひなきことと思ひたまへ返せど、(2)いかばかりしみはべりにけるにか、年月にそへて、口惜しくも、つらくも、むくつけくも、あはれにも、いろいろに深く思ひたまへまさる

にせきかねて、かくおぼけなきさまを御覧ぜられぬるも、(5)かつはいと思ひやりなく恥づかしければ、罪重き心もさらにはべるまじ」と言ひもてゆくに、［女三宮ハ］この人なりけり、と思すに、いとめざましく恐ろしくて、つゆ答へもしたまはず。

［柏木］「いとことわりなれど、世に例なきことにもはべらぬを、めづらかに情なき御心ばへならば、いと心うくて、なかなかひたぶるなる心もこそつきはべれ。(6)あはれ、とだにのたまはせば、それを承りてまかでなむ」と、よろづに聞こえたまふ。

（若菜下、四・二一五〜二一六）

今、この二つの場面に①〜⑥・(1)〜(6)の傍線を私に付したが、対応する番号の関係を順を追って見てゆこう。

まず一点目として、寝覚の帝と柏木にはそれぞれの〈身の程意識〉が見られる。むろん柏木が「数ならねど」というのは、皇女に対し臣下である自分の身分を卑下する意識の表れであるのだが、「こうまであなたがお思いになられるような者とは思われません」とも言っている(1)。つまり、身分は低いがこうまで疎まれるのは心外だというのである。一方、帝の方では、誰はばかることもないはずの最高権威者であるにも関わらず、寝覚の上に相手にもされぬ自分を卑下しているのだと訴えている(1)。これは柏木の訴えとちょうど逆の発想といえ、男の身分と相手の女の身分との逆転に注意しておきたい。

ついで第二点目は、両者共に、相手の女に対する積年の思いを告白している(②・(2))。この部分は前に見た〈闖入〉の動機に対応するものである。相手の女が他の男のものになってしまったことで、自分の相手に対する思いが無駄になってしまったが、長年に渡り諦めきれない思いを抱いていることを知ってもらいたい、という願いを訴えているわけである。

第三点目は、そもそも自分は相手の女性の後見人からもそう退けられてはいない、と述べ、自分の訴えは的外れなものではないのだ、とする自己正当化であり(③・(3))、第四点目は、「今となってはあなたは他の男のものとなってしまった、自分とは縁の無かった人なのだと思っている」(④・(4))という諦めの表明である。そして第五点目では、その表明に加えて、「自分はもうあなたのことを諦めているから、今更大それた事は考えてもいない」(⑤・(5))と相手を安心させ落ちつかせようとする。

第六点目は、相手の女に対する「あはれ」の要求である。帝も柏木も共に相手からの「あはれ」の一言を待っている。この「あはれ」を求める思いは、後にもそれぞれ繰り返され、二人の心情をつなぎ合わせる言葉となっているのである。

［寝覚ノ帝］「…つゆばかりもあはれと思し知る気色もなきが、憂くあさましきこと」（三二二）

「…いみじ、とも、あはれあり、情けあり、と思さるべきにもあらざめり。」（三二三）

［柏木］「…すこし思ひのどめよと思されば、あはれ、とだにのたまはせよ」（四・二一九）

以上のように、帝と柏木の「口説き」の内容は六点にわたり一致し、かつ順序もほぼ同じであるばかりか、行動の動機も通じるものがあったことが確認される。

そして、帝の〈闖入〉と柏木の〈密通〉の共通点はこれだけではない。それぞれの場面の導入部における、女の描写を見てみよう。

・［寝覚ノ上］汗になりて、水のやうにわななきたる気色　（三・一二）

・［女三宮］　わななきたまふさま水のやうに汗も流れて、ものもおぼえたまはぬ気色　（四・二一四）

このように、語の順序の差こそあれ、突然の侵入者におののく女の様子をどちらもほぼ同じ語によって表現している。すなわち、寝覚の上を描写したこの表現から、柏木と女三宮の〈密通〉がただちに想起される仕組みになっているのであり、『夜の寝覚』の〈帝闖入〉が柏木の〈密通〉をなぞる形で始まっていることを示す導入的表現になっているのである。

これらのことから、〈闖入〉の始発において帝はまさに柏木の〈密通〉を再現していることが確認されよう。至尊の帝が臣下の未亡人のもとに〈闖入〉し、その表現が臣下の男と皇女との〈密通〉に重ね合わせられている。この一見奇妙な逆転の構図は何を意味するのか。寝覚の上が帝より優位に立つ理由は、彼女を主人公たらしめている、かの〈天人予言〉に他ならないが、後に述べるように、地上の最高権威者たる帝ですら寝覚の上の理解者とはなりえない。物語は彼女をこの絶対的な孤独の中で主人公として存立させているのである。『源氏物語』では物語内の現実の身分として在った上下関係が、『夜の寝覚』では物語内の現実の身分とは無関係な物語の論理として語り直されてくる。この、寝覚の上を物語の最高位に据えようとし続ける『夜の寝覚』の表現の方法は、〈闖入〉においても貫かれているのだといえよう。

〈帝闖入〉事件の始発においては、帝は柏木であった。とすると寝覚の上もまた、女三宮と同じように男の手に落ちてしまうのだろうか。想起された〈密通〉はしかし、実際には再現されず、帝は寝覚の上を手放してしまう。それはどのような表現によって可能となったのだろうか。

三

前に挙げた〈闖入〉の場面の考察において、あえてふれずに残していた箇所がある。傍線部(A)〜(D)がそれなのだが、これらの表現は何に拠っているのか。前節で女のおののきの描写が『夜の寝覚』と『源氏物語』若菜下とで一致することを指摘したが、実は『源氏物語』にはもう一箇所、同様の表現が見られるのである。それは次に挙げる夕霧巻の一場面である。

［逃ゲヨウトシタ落葉ノ宮ヲ、夕霧ハ］いとようたどりて、ひきとどめたてまつりつ。御身は入りはてたまへれど、御衣の裾の残りて、障子はあなたより鎖すべき方なかりければ、ひき閉てさして、水のやうにわななきおはす。　（夕霧、四・三九四）

男の不意の侵入に「水のやうにわなな」く女がここにも存在していた。柏木の女三宮への〈闖入〉の再現とも受け取れるこの表現に導かれるように、男は彼女を前にしてこのような「口説き」を展開する。

・［夕霧］「かばかりにてさぶらはむが、人よりけにうとましう、

めざましう思さるべきにやは。(I)数ならぬとも、御耳馴れぬる年月も重なりぬらむ」とて、いとのどやかにさまよくもてしづめて、思ふことを聞こえ知らせたまふ。…「(a)いと心憂く若々しき御さまかな。人知れぬ心にあまりすきずきしき罪ばかりこそはべらめ、(d)これより馴れ過ぎたることは、さらに御心ゆるされでは御覧ぜられじ。いかばかり千々に砕けはべる思ひにたへぬぞや。さりともおのづから御覧じ知るふしもはべらんものを、強ひておぼめかしう、けうとうもてなさせたまふめれば、聞こえさせん方なさに、いかがはせむ、心地なく憎しと思さるとも、(II)かうながら朽ちぬべき愁へを、さだかに聞こえ知らせはべらんとばかりなり。いひ知らぬ御気色のつらきものから、いとかたじけなければ」とて、(d)あながちに情深う用意したまへり。(四・三九三)

・「(b)なほかう思し知らぬ御ありさまこそ、かへりては浅う御心のほど知らるれ。(四・三九五)

・「落葉ノ宮ハ」心強うもてなしたまへど、「夕霧ハ彼女ヲ」はかなう引き寄せたてまつりて、「(c)かばかりたぐひなき心ざしを御覧じ知りて、心やすうもてなしたまへ。(d)御ゆるしあらでは、さらにさらに」といとけざやかに聞こえたまふほど、明け方近うなりにけり。(四・三九七)

前に挙げた帝と柏木の「口説き」の発想の六つの共通点の内、(I)・(II)は夕霧にも見られるものである。それを確認した上で、柏木には見られなかった要素を確認してゆくことにする。

まず、相手の女性の心惑いのさまを「心憂く、若々しき」と言い(A)・(a)、また「そのような惑乱ぶりでは返ってお心の浅さが窺われる」と非難する(B)・(b)。しかし「私の心持ちを御覧下さい、何も心配はありません」と女をなだめ(C)・(c)、「あなたがお心を許して下さらないなら、あなたのお気持ちに反するようなことはいたしません」と自らの行動を制約してしまう(D)・(d)。帝も夕霧も、自分自身の言葉に縛られて、相手の女に手出しできなくなるのである。

このように、夕霧の「口説き」自体が柏木の「口説き」の延長上にあるのだが、柏木として語り始められていた寝覚の帝の「口説き」には、実は夕霧の「口説き」が少しずつ入り込んでいたのである。すなわち、〈帝闖入場面の始めにおける帝は、いわば柏木と夕霧とを混ぜ合わせたような人物として表現されていたのだった。

しかし、柏木の「口説き」との重ね合わせによって想起された〈密通〉の可能性は、夕霧の「口説き」によって完全に回避されたわけではない。なぜなら、夕霧はついには落葉の宮を手に入れるからだ。寝覚の上が帝の手に落ちる可能性はまだ排除されてはいない。にも関わらず、寝覚の上は帝の手から逃れ得た。それは何故なのか。

四

ここで注目すべきは、『源氏物語』宿木巻において中の君に迫る薫の「口説き」である。次の場面を見よう。

[中ノ君]「思ひの外なりける御心のほどかな。人の思ふらんことよ。あさまし」とあばめて、泣きぬべき気色なる、すこしは

ことわりなれば、いとほしけれど、［薫］「これは咎あるばかりのことかは。かばかりの対面は、いにしへをも思し出でよかし。(Ⅲ)過ぎにし人の御ゆるしもありしものを。(B)いとこよなく思しけるこそ、なかなかうたてあれ。(C)すきずきしくめざましき心はあらじと、心やすく思ほせ」とて、いとのどやかにはもてなしたまへれど、月ごろ、悔しと思ひわたる心の中の苦しきまでなりゆくさまをつくづくと言ひつづけたまひて、ゆるすべき気色にもあらぬに、せん方なく、いみじとも世の常なり。

（宿木、五・四一六）

むろん『源氏物語』との前後関係を考えるとあり得ないことではあるが、一見これは、既に見た〈闖入〉始発における帝の「口説き」の要約ではないかと思われるほどではないか。

薫の「これは咎あるばかりのことかは」という言葉は、帝の「こは、いとかうもの思し知るまじきほどかは」という言葉に対応している。以下、相手の保護者を引き合いにした自己正当化(Ⅲ)、相手の惑乱に対する非難(B)、自分の心ばえを見て安心して欲しいとなだめる言葉(C)という対応が見られる。すなわち、この部分での薫の「口説き」はそのまま柏木あるいは夕霧の「口説き」の変奏なのであり、ひいては寝覚の帝の「口説き」へとつながるものなのである。

さらに、二重傍線部以下の「いとのどやかにはもてなしたまへれど」という薫の様子は、前に見た「いとのどやかに恥づかしげに、情けなき乱れはせさせたまはぬに」という帝の様子そのものである。この後延々と詳細に繰り返される帝の「口説き」も、宿木巻のこの場面の「月ごろ、悔しと思ひわたる心の中の苦しきまでなりゆくさまをつくづくと言ひつづけたまひて、ゆるすべき気色にもあらぬに」という地の文を具体化したものとも解せよう。

しかし、薫の「口説き」が柏木や夕霧の「口説き」の変奏であるとはいっても、その行き着くところは全く異なっているのであり、薫の薫たる所以はむしろこの後にある。中の君の袖をとらえるところまで迫っていながら、

男君［＝薫］は、いにしへを悔ゆる心の忍びがたさなどもいとしづめがたかりぬべかめれど、昔だにあり難かりし御心の用意なれば、なほいと思ひのままにももてなしきこえたまはざりけり。…かひなきものから、人目のあいなきを思へば、よろづに思ひ返して出でたまふ。まだ宵、と思ひつれど、暁近うなりにけるを、見とがむる人もやあらんとわづらはしきも、女の御ためのいとほしきぞかし。［薫］「…いと恥づかしと思したりつる腰のしるしに、多くは心苦しくおぼえてやみぬるかな。例のをこがましの心や」と思へど、「情なからむことはなほいと本意なかるべし。また、(あ)・(い)たちまちのわが心の乱れにまかせて、あながちなる心をつかひて後、心やすくしもあらざらむものから、わりなく忍び歩かんほども心づくしに、女のかたがた思し乱れんことよ」など、(う)さかしく思ふにせかれず、今の間も恋しきぞわりなかりける。さらに見ではえあるまじくおぼえたまふも、かへすがへすあやにくなる心なりや。

（宿木、五・四一七～四一九）

と、結局は何もできぬままに終わってしまう。「昔だにあり難かりし

御心の用意なれば」とあるように、それは今に始まったことではない。以下に見るように、かの大君に対しても幾度か機会がありながら、結局何事もなく終わってしまっていたのであった。

・言ふかひなくうし、と思ひて泣きたまふ［大君ノ］御気色の(う)いといとほしければ、［薫ハ］かくはあらで、おのづから心ゆるびしたまふをりもありなむ、と思ひわたる。わりなきやうなるも心苦しくて、さまよくこしらへきこえたまふ。

（総角、五・二二五）

・［匂宮ガ中ノ君ノ所ヘ行ッタコトヲ、薫ガ大君ニ告ゲル］「…なほ、いかがはせむに思し弱りね。この障子の固めばかりいと強きも、まことにもの清く推しはかりきこゆる人もはべらじ。…」とて、障子をもひき破りつべき気色なれば、いはむ方なく心づきなけれど、(え)こしらへむと思ひしづめて…［大君、懸命ニ訴エル］…といみじくわびたまへば、さすがにことわりをいとよくのたまふが心恥づかしくらうたくおぼえて、［薫］「あが君、御心に従ふことのたぐひなければこそ、かくまでかたくなしくなりはべれ。いひ知らず憎くうとましきものに思しなすめれば、聞こえむ方なし。いとど世に跡とむべくなむおぼえぬ」とて、「さらば、隔てながらも聞こえさせむ。ひたぶるになうち棄てさせたまひそ」とて、(え)ゆるしたてまつりたまへれば、這ひ入りて、さすがに入りもはてたまはぬを、［薫ハ］いとあはれと思ひて、「かばかりの御けはひを慰めにて明かしはべらむ。ゆめゆめ」と聞こえて、うちもまどろまず、いとどしき水の音に目も覚めて、夜半の嵐に、山鳥の心地して明かしかねたまふ。

（総角、五・二五五〜二五七）

これが薫と柏木・夕霧との最も顕著な違いであることは言を俟たないであろう。「かけかけしき事はなくてやみなん」と思いながらも女三宮を目の当たりにして我を忘れた柏木と、「かうあながちに従ひきこえても、後をこがましくや」という危惧を抱きながら我を通して落葉の宮（＝女二宮）を妻とした夕霧。この二人が共に女の意思を尊重することなく自分の要求を押しつけたのに対して、薫は

・「見とがむる人もやあらんとわづらはしきも、女の御ためのいとほしきぞかし」

・「泣きたまふ御気色のいといとほしければ」

という。つまり、「いとほし」という女への同情から、自らの恋情を中途半端な形で放棄するのである。これが薫の「をこがまし」という思いを導き出すことについては既に拙稿（注3に同じ）で論じた通りだが、結果として女の意思を尊重する形で、実事無き〈逢瀬〉――この言い方自体、既に矛盾しているようだが――を重ねる薫のありようは、柏木や夕霧に対する反措定といえるだろう。

このような薫のありようは、まさに寝覚の帝の原型であるといえまいか。すなわち、〈闖入〉始発において柏木であった帝の姿が薫的なありようへと変化していくことが、この後の「口説き」によって明らかにされているのである。次の場面を見よう。

・［帝ニ対スル寝覚ノ上ノ反駁］…と、いみじうすくよかに言ひなさむと何の情けもつけず、えも続けやらず、かごとがましげなる気配の、いとどらうたくうつくしう、心にのみ沁みまさりておぼさるれど、［帝ノ心中］「まことに、ただかく行く手に、

(ア)情けなくあながちに押し立ちても、かばかり思ひ惑ふにては、憂し、つらし、と思ひ入りて、やがて今は参らずなりなば、軽らかにせめて尋ね寄るべきにもあらぬに、今少しわびしさのみこそまさらめ、何のかひあるべきにもあらず。…げに思ひ惑ひたるさま、いとことわりに心苦しきを、(イ)憂しつらし、と思ひ果てられては、一時の心地こそゆくとも、ながらへての身の嘆きはまさるつまとこそならめ。『いかがはせむ、いふかひなし』と思ひなるべき気色にもあらざめり。そもことわり、(ウ)この瀬を、いみじう情あるものとだに思ひ知られなば、いつもいつも自づから、かくわりなからぬ瀬もありなむ」など、かたがた思し忍びて、いとやはらかになまめかしくもてなさせたまひて、あながちになごめて、ただうち添ひ臥いたまひて

(三一八〜三二〇)

・[帝ヲナダメヨウトスル寝覚ノ上ノ言葉ニ、帝ハ]〔エ〕いみじう心苦しく思しなられて、[帝]「さだに思し知らば、それにかへつる命にて、痴れ痴れしき名をも流しつべしや」と、〔エ〕うちゆるべさせたまふに

(三二四)

・言ひも果てぬやうにて、せめてすべり出でたまひぬる名残、とばかり見送らせたまひて、[帝]「などて、をこがましく。かかる逢瀬は難くこそあらめ。あながちに心苦しさを見知りつるぞや」と、(オ)悔しく、いみじくおぼさるるに、人目苦しからずは、やがてたちつづきぬばかりの御心地ぞせさせたまふ。(三三〇)

帝が寝覚の上を見送るに至る経過を抜粋したが、ここに挙げた三箇所以外の部分では、帝は寝覚の上をなだめた後もなお縷々恨み言を言い続け、あまつさえ再び荒立ちもしたのであり、その心情の変化は決して一筋ではない。が、帝の辿った心情の変化の大筋(ア)〜(オ)は、やはり薫の心情と重なっているのである。「今ここで激情にかられて無理を通しても、相手に疎まれてしまっては思うように逢うこともできず返ってこちらがつらくなるだけだ」と考え(ア)・(あ)／(イ)・(い)、「(この嘆きようを見ても)相手は筋の通らぬことと受けとめているようなので、改めて落ち着いて会えるような機会を待とう」とひとまず諦めて、相手に対し穏やかに振る舞う(ウ)—(う)。そして女の懸命な訴えに心を動かし、手をゆるめてしまうのである(エ)—(え)。

このように見てくると、寝覚の帝の「口説き」の発想は、既に薫が宇治の大君あるいは中の君に対して展開していた「口説き」の継ぎ合わせのようではないか。発想のみならず、(ウ)—(う)の対応では同じ語を用いて表現されており、語のレベルでも対応しているのである。さらに、このような実事無き〈逢瀬〉によって導き出される彼らの心情に注目したい。

(オ)[寝覚ノ帝]悔しく、いみじくおぼさるるに、人目苦しからずは、やがてたちつづきぬばかりの御心地ぞせさせたまふ。

(お)[薫]さかしく思ふにせかれず、今の間も恋しきぞわりなかりける。さらに見てはえあるまじくおぼえたまふも、かへすがへすあやにくなる心なりや。

女に手出しすることなく終わったのは自分自身の選択によるものでありながら、早くもその直後に後悔の念がわいてくる。さきほどまでの自制が今はもう、「なんとしても女を手に入れたい」という欲求に圧倒されているのだ。それは宿木巻の草子地にいうように「かへ

すがへすあやにくなる心」に他なるまい。そしてオとおの直前には、前に言及したように、共に「をこがまし」という思いが述べられていたのである。

このような発想及び語句の一致の状況から見て、両者が単なる「口説き」の類型表現であるとは考え難いだろう。〈闖入〉場面における寝覚の帝の「口説き」は、始発においては明らかに柏木になぞらえられたものであり、そこには夕霧の「口説き」が入り込んでいた。ところが、帝の後半の「口説き」は、薫の「口説き」になぞらえて語られているのである。すなわち、『源氏物語』において女のもとへ侵入する三人の男たちの「口説き」の再構成によって表現されたもの、それが〈帝闖入〉における寝覚の帝の「口説き」だったのだ。

五

さて、前節までの考察をふまえて問題としたい一文がある。それは〈闖入〉場面の終わり近く、帝と寝覚の上との歌の贈答の前の対話である。

[寝覚ノ上]「人いかに思ひはべらむ。かばかりは、いつもいつも、あなたにていとよくきこえさせはべりぬべきを」と言ひ出づるを、まことにいと思ひ入りけるも、少しは、げにことわりなれば、[帝]「『いとよう』こそ、あまり心やすき御文字遣ひなれ。かばかりいみじく従ひきこえたる心の痴れ痴れしさを思し知らぬものならば」と、よろづに恐ろしげに誓ひ聞かせたまひつつ、今宵は中宮のぼらせたまふべき夜なるに、人も、いかにあやしと尋ね思ふらむ、我が御身の紛れ難く所狭くなり初めたまひけむも、この人ゆゑは、悔しくもいとはしくも思しなられさせたまひつつ、「明日は逢瀬」と頼むべくもあらざめる人の気色に、ただ我が情けばかりを尽くし知らせたまふ。「さりとも、思ひ知らずはあらじかし」と思しめす。（三二六〜三二七）

問題は、傍線を付した「少しは、げにことわりなれば」という帝の心中に沿った地の文にある。人目をはばかり話を途中で打ち切ろうとする寝覚の上の様子を、帝は「少しは、なるほど全く道理だ」と考えている。「なれば」と順接であるから、この後には寝覚の上に対して、彼女の言い分を認める発言なり慰めの言葉なりがあってしかるべきであろう。しかし予想に反して、その直後の帝の発言は、彼女の「いとよく」という言葉を逆手に取った脅し文句である。そのあとで、今夜は中宮が夜の宿直に参上する予定であることを思い出し、帝の位も寝覚の上を思う心からすれば不自由でうっとうしいものと思いながら、帝は思いを尽くして自分の情の深さをわかってもらおうとするのである。ここまで辿ってきてようやく「少しは、げにことわりなれば」を受けるような内容になるのだが、では「ただ我が情けばかりを…」の部分が「…ことわりなれば」を直接受ける部分で、途中は全て挿入句だったのか、と考えるにしても、ここまでの一連の文章は遠回りであり、不自然さはぬぐい去れない。

そこで別の考え方を示したい。というのは、いったん「少しは」と言っておきながら「げに」と後追いするように付け足している、その言い方にも、いささかの不自然さを感じるからである。帝は既にここまでの「口説き」で、

・いと憂くも怖ぢ惑ひたまへるかな。ことわりなれど　（三一五）
・はた、かかるおほぞうの行く手に、げに思ひ惑ひたるさま、いとことわりに心苦しきを…『いかがはせむ、いふかひなし』と思ひなるべき気色にもあらざめり。そもことわり　（三一九）

と、幾度も寝覚の上の惑乱に対し「もっともなことだ」と認めていた。だから、この部分もこれまでの言辞から判断すると「げにことわり」だけでよいはずなのである。それなのに何故今になって「少しは」というのか。「少しは」という言葉を引きだしたものは何なのか。

思うにこれは、この部分の「口説き」の元になった表現に原因があるのではないだろうか。そう思わせるに足るような箇所が、実は薫の「口説き」にある。それは、前節の初めに挙げた宿木巻の一場面である。

「思ひの外なりける御心のほどかな。人の思ふらんことよ。あさまし」とあぢめて、泣きぬべき気色なる、すこしはことわりなれば、いとほしけれど、［薫］「これは咎あるばかりのことかは。かばかりの対面は、いにしへをも思し出でよかし。過ぎにし人の御ゆるしもありしものを。いとこよなく思しけるこそ、なかなかうたてあれ。すきずきしくめざましき心はあらじと、心やすく思ほせ」とて…　（五・一四六）

既出箇所ではあるが、あえて再掲出した。薫の突然の接近に驚き反駁する中の君の「人の思ふらんことよ」という言葉は、人の思惑を気にすると言う点で、寝覚の上の言葉に通じるものである。そして、それに続く薫の心中に沿った地の文では「すこしはことわりなれば、いとほしけれど」という。すなわち、中の君の言い分も多少はもっともなことだと思いながら、「いとほしけれど」という逆接の文脈によって「これは咎あるばかりのことかは。…」と、「ことわり」「いとほし」という思いを打ち消すように女をかき口説いているのである。女の気持ちをいったんは認めつつも、なお自らの思いを綿々と打ち明けずにいられない男の心情を、この場面は語っているといえよう。

そこで寝覚の帝の「口説き」の問題に立ち戻ろう。「少しは、げに」の語続きの不自然さ、そして、地の文の直後の帝の言葉の内容との齟齬、これらへの疑問を解消するためには、この部分の寝覚の帝の「口説き」が、薫の「口説き」の引用でありながら、その「口説き」から「いとほしけれど」という発想を意図的に排除したものだと考えなければなるまい。それはとりもなおさず、帝の「口説き」を構成する要素として薫の「口説き」が取り込まれているという考えを補強することになろう。

ここでもう一つ注目しなくてはならないのは、薫にはあった「いとほし」という発想が寝覚の帝にはない、ということそのものである。

池田和臣氏は、薫のこの当該場面の「いとほし」が「中君に同情する語り手の評言」と「明らかに対応している」と論じられた(5)。これは重要な見解であろう。薫が、「いとほし」という思いを抱き、女に対して行動を起こせなくなることについては前に見た通りだが、薫はそれゆえに、結果として読み手には好意をもって支持された。このことは例えば、薫が『無名草子』において

薫大将、はじめより終はりまで、さらでもと思ふふし一つ見えず、返す返すめでたき人なんめり。

（小学館・完訳日本の古典、二三一頁）

と評されていることからも窺われよう。そして語り手の「いとほし」という評言は、語り手が女の立場を尊重するものとして存在することを示しているのである。

一方、『夜の寝覚』はどうか。確かに〈帝闖入〉事件においても、女に対するこのような「いとほし」という思いが第三者によって発せられている。それは、大皇の宮と縁続きにあたり、内大臣の語らい人であった、宣旨の君という人物である。彼女は、「心のうちには、いとよくもの思ひ知り、心ばせありて、この上の御ありさまを、えさらず思」っており、寝覚の上のことを「悲しきまですずろに思はしう思ひきこえついたる人」（三一一）であると紹介され、次いで大皇の宮の仕組んだ〈闖入〉の計画を知り、

かかる御かまへを、「あないとほし。いかにあきれ、いたう思さむ」と、いみじう心苦しけれど、えも言ひ出でず、うち嘆きて、月影にめでたき御有様をうちまもりて居たるに

（三一一～三一二）

と、寝覚の上の身を案じている。この直後、彼女の見守る中で〈帝闖入〉事件が起こるのである。宣旨の君のこの心内語によって、〈帝闖入〉事件は初めから、寝覚の上にとって「いとほし」きこと以外の何ものでもないと規定されている。読者は宣旨の君に感情移入することによって、その「いとほし」という思いを共有しつつ〈闖入〉を読み進めることが要請されているのだといえよう。

加えて、帝の最初の「口説き」の後にも、このように語られている。

［寝覚ノ上ガ］かくのみ沈み入るをも、げに、あないとほしと言ひ寄りて引き放つべき人もなし。…宣旨の君の唐衣の袖ばかりを［寝覚ノ上ガ］ひかへたりつるも、［宣旨ノ君ハ］いとかたはらいたかりければ、心苦しくいとほしく思ふ思ふ、脱ぎやりて、御几帳の後ろにゐざり退きにたり。

（三一七）

「げに」の一語から、この部分が前に語られていた宣旨の君の「いとほし」という心内語を承けているものと判断されるが、語り手によって要請されているこの言葉は宣旨の君の心中に込められたまま、寝覚の上の危機的状況は依然続く。このように、『源氏物語』宿木巻に見られるような、女の側に立つ語り手の目が、〈帝闖入〉事件においても存在しているのである。

薫はこのような語り手の視点を共有し、そこに理想性が認められていた。ところが、寝覚の帝の場合、あれほど長大な〈帝闖入〉場面における「口説き」の中で、帝は寝覚の上に対してついに一度も「いとほし」という思いを抱くことはないのである。「いとほし」という語り手の視点の共有は、『夜の寝覚』の帝には行われていない。つまり、語り手と作中人物とを通して読者が共有を要請されてきた「いとほし」という思いが、寝覚の帝の発想からは欠落しているのだ。ここに寝覚の帝と薫との明らかな差異が認められよう。〈闖入〉場面において、帝の「口説き」が次第に薫的な「口説き」へと変化してゆくことで、換言すれば、帝の人物像が柏木と夕霧との混成から薫的な人物像へと変容してゆくことで、物語は寝覚の上の危機を回避

せしめているのだが、薫に付与されていた女への同情という理想性は、寝覚の帝には引き渡されなかったのだ。すなわち、〈帝闖入〉場面で寝覚の帝が変容の果てに行き着いたのは、女との共有の視点を持たぬ「薫」なのであって、薫そのものとは微妙だが決定的に異なる人物像なのである。

この「いとほし」という発想の欠落は、帝位という至尊の身分に由来するものであって、当然のことなのだと見做し得るかもしれない。しかし、〈帝闖入〉事件が寝覚の上にとって「いとほし」き事態なのだと、宣旨の君を通してその始発前から規定されていた以上、帝はやはり、寝覚の上の心情を真に理解しようとしている存在とはいえないであろう。帝は寝覚の上の真の理解者とはなり得ない者として造型されているのである。(6)

六

帝の「口説き」の変化、帝像の変容の大筋は柏木――夕霧――薫の線上を辿っており、しかも帝像の行き着いた所は薫的ではあるが微妙にずれていることについて論じてきた。同一の思考パターン・同一の口説き文句の繰り返しによって、帝像は変化し、あるいは逆戻りしつつ、次第に〈闖入〉始発時とは異なる人物像へ変容してゆくのである。その行き着いた先は、薫的ではあるが薫そのものではないものなのであった。

ところで〈闖入〉における帝の「口説き」の構成要素のうち、三人の男達以外のもの、すなわち柏木――夕霧――薫の線上から外れているものがあることを忘れてはなるまい。次に挙げる「口説き」を見よう。

[帝]「…これに懲りたまふとて、内などに居ること難くなりたまひたらば、ただ今年のうちにこの位をも捨てて、八重立つ山の中を分けても、必ず思ふ本意かなひてなむやむべき。いみじく思ふさまに定まり果てたまひぬとも、それを、さて聞くべきにもあらず。人の見聞かむところなども、よろしくたどるべきわざにもあらざりけりと、すべて現心もあるまじければ、我も人もいたづらになるべかりける事のさまかな、となむ思ゆる」

(三一五～三一六)

二重傍線部は、次に挙げる『源氏物語』浮舟巻の、

[浮舟ノ心中]「…あやにくにのたまふ人、はた、八重立つ山に籠るとも必ずたづねて、我も人もいたづらになりぬべし、なほ、心やすく隠れなむことを思へと、今日ものたまへるを、いかにせむ」

(六・一五六)

に拠る表現か、と『夜の寝覚』の諸注釈書は指摘している。ここで「あやにくにのたまふ人」とは匂宮を指すので、傍線部は浮舟に思い起こされている匂宮の言葉ということになる。薫の「口説き」が、明らかに帝の「口説き」の構成要素として組み込まれていることは、既に確認してきた。であるならば、帝の「口説き」に入り込んでいる、浮舟に向けて発せられたこの匂宮の言葉もまた、単なる類型表現と見做すべきではなかろう。すなわち、失われた「いとほし」という発想に代わって、浮舟を追いつめた匂宮の情念が帝の「口説き」に入り込み、寝覚の上に対する帝の狂おしいまでの執心が表現され

ているのである。

寝覚の上に対する帝の執心が、末尾欠巻部に推定されている〈寝覚の上偽死事件〉[7]を引き起こしたのではないか、ということについては従来指摘されている。また鈴木一雄氏が推定されたように、〈擬死事件〉は〈帝闥入〉事件の構想の再現なのであろう。[8]しかし、より直接にこの匂宮の言葉の引用表現を考える時、匂宮と薫との間で悩み追いつめられ、ついに入水しそして再生する浮舟の辿った運命が、可能性として寝覚の上の身に想起されるのだとはいえまいか。そして、寝覚の上をそこまで追いつめた帝の執念は、薫の「いとほし」ではありえず、匂宮の情念であったといえる。言い換えれば、女との実事なき〈逢瀬〉を重ねる薫的な「口説き」に行き着いてしまった帝は、もはや匂宮の「口説き」を組み込むことによってしか、その後の物語の推進力たり得る可能性を持ち得なかったのだ。

〈帝闥入〉場面には、帝の「口説き」が柏木・夕霧から薫へと変化してゆくという、帝像の変容過程が示されているのであり、そこには明確な方法意識が認められる。そしてこのような表現方法によって、寝覚の上の危機回避が可能となり得たのである。その結果、帝は薫的な「をこがまし」という思いを抱え持つ者となりつつも、匂宮の情念を「口説き」に組み込まれることで、後の物語展開における寝覚の上の再度の危機をもたらす可能性を与えられたのだといえよう。

〈帝闥入〉場面における帝の「口説き」は確かに、一つ一つ個別に見たなら、『源氏物語』の男たちの「口説き」の模倣であり、単なる類型表現の寄せ集めのように思われるかも知れない。だが、一つ一つの類型表現の巧妙な集積によって、寝覚の上の危機が回避されてゆくということは、ここまで確認してきた通りである。これはもはや単なる類型表現の寄せ集めではなく、〈類型表現の再構成化〉ともいうべき、物語の表現方法と見做さねばならないだろう。〈帝闥入〉場面においては、従来着目されてきた心理の掘り下げという方法に加えて、以上のようなもう一つの表現方法を確認し得るのである。

注

(1) 『夜の寝覚　研究』（平成二・五、笠間書院）第三章「第三部における人間の認識」一九〇頁。

(2) 石川徹氏『古代小説史稿』（昭三十三・五）四二二～四二八頁に『源氏物語』との表現・構想上の類似が数多く指摘されている中の一つ、帚木巻における光源氏と空蟬の逢瀬との類似（四二五頁）をはじめ、賢木巻の光源氏と藤壺の応酬との比較（関根慶子氏「寝覚物語における「帝闥入事件」を考える」、『源氏物語及び以後の物語　研究と資料――古代文学論叢第七輯――』武蔵野書院、昭五十四・十二）、総角巻における薫と宇治の大君とのやりとりの表現との類似の指摘（鈴木紀子氏「「夜の寝覚」と宇治十帖――大君物語との関係――」「名古屋大学国語国文学」三七、昭五十・十二）などが挙げられる。

(3) 「「をこがまし」の系譜――『夜の寝覚』の帝試論――」（「国語国文研究」第一〇三号、平成八・五）。

(4) 『夜の寝覚』本文は、『校本夜の寝覚』（高村元継氏編、昭和六十一・十、明治書院）の島原本の翻刻に拠り、適宜仮名遣いを改め漢字を当て句読点を施し、必要と認めた箇所は私に校訂したものを用いる。頁数は『校本夜の寝覚』に拠って示す。なお、島原本本文については、影印校注古典叢書『夜の寝覚（一～五）』（大槻修氏・大槻節子氏、新典社、昭和五十一～五十八）をあわせて参照した。

(5) 「薫の人間造型」（『源氏物語の探究　第十五輯』風間書房、平二・十）。

(6) このことは、物語冒頭のいわゆる〈天人予言〉によって通告されていた寝覚の上の孤独の実現なのであると考えるが、これについては稿を改めたい。

(7) 『無名草子』に、

返す返す、この物語の大きなる難は、死にかへるべき法のあらむは前の世のことなればいかがはせむ、…いみじくまがまがしきことなり。

（小学館・完訳日本の古典、二五六～二五七頁）

とあることから推定されている。事件の詳細は不明だが、帝が寝覚の上に再度接近した際、寝覚の上が仮死状態に陥ったか、あるいは偽装して帝から逃れたのではないかといわれる。小学館・日本古典文学全集『夜の寝覚』「末尾欠巻部分　概略」五七一頁。

（たかはし　まさえ・北大大学院博士課程）